

2022年3月24日

第14回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰 受賞者決定のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、2021年度「第14回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)の受賞者を決定しました。

本賞はスポーツ振興に多大な実績を残すとともに、社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てているのが特徴です。

受賞者の詳細は、以下のとおりです。

第14回受賞者のご紹介(敬称略)



[功労賞] 伊藤 裕子 (いとう ゆうこ)

障害がある子ども向けスイミングスクールで
だれもが楽しく学べる機会を提供

スイミングコーチ



[奨励賞] 山下 良美 (やました よしみ)

女子国際主審・サッカー1級審判員として
国内外の試合で主審担当
スポーツ界における女性活躍を牽引

サッカー1級審判員・女子国際主審

スポーツチャレンジ賞については
<https://www.ymfs.jp/project/culture/prize/>



※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:大庭)

障害がある子ども向けスイミングスクールでだれもが楽しく学べる機会を提供 水中だからこそ「できる」体験を通し、「あきらめない」気持ちを育み、心のバリアフリー化を目指す

伊藤 裕子 (1962年生・岐阜県出身) スイミングコーチ

1992年市民プールの一角で障害のある子どもたちの水泳指導を開始。陸上ではヨチヨチでも、水中では飛ぶように泳ぐペンギンの特性から、「どんな障害があっても可能性をあきらめず、伸び伸びと挑戦してほしい」との願いを込めて「ペンギん村水泳教室」とネーミング。また市民プールの設備では、どうしても受け入れが難しい障害の重い人もいることから、2016年には、障害のある人もない人も利用できるスポーツ施設「メディカルフィットネスクラブ LEN」を開設。これまでに500人以上を指導し、その中には金メダルに輝いたパラリンピアンも。近年では、水中運動がリハビリに適し効果を発揮していることから、メディカルスポーツとしても注目されている。

「チャレンジの足跡」「これが、僕の手だよ」。障害のある子どもに水泳を教える活動を始めて1年経とうとする頃だった。先天性四肢形成不全症の6歳の男の子が颯爽とスケートボードに乗ってやってきた。集まって来た子どもたちに囲まれ「なぜ手がないの?」と聞かれたその子は、欠損した右手を差し出し「これが僕の手だよ」と続けたのだった。すべてを受け入れている少年の振る舞いに、「どんな障害があろうともすべてを全身で受け止めよう」と心が決まった瞬間だったとペンギん村水泳教室代表の伊藤 裕子さんは振り返る。先の東京パラリンピックで、出場した5種目すべてでメダルを獲得した競泳の鈴木 孝幸選手が教室の門戸を叩いた時のことだ。

伊藤さんが本格的に水泳を始めたのは高校生の時。「スポーツが大好きでしたが、低血圧症だったので横になったままできる競技はないか(笑)」と選んだそうだ。岐阜は長良川の近くで育ち、小学生の頃から泳ぎは得意だった。

元々私立の幼稚園教諭だった伊藤さんは、系列にスイミングスクールができることになり、コーチ募集を知って手を挙げ、ベビースイミングなどの水泳指導法を学んでスイミングコーチに転身したのだった。その後、大阪、岐阜、静岡と移り住むも、スイミングコーチは続けていた。浜松のスイミングスクールに勤めていたある日、車いすに乗る一人の脳性まひの男の子が入会したいとやって来たのだ。会った瞬間に経験値から「この子、水の中なら立てるな。泳ぎは? どうやって水の中を楽しんだらう、教えてみたいと興味を持った」と伊藤さん。それまでも「リゾートホテルのプールで優雅に泳ぎたい」という80歳を超えるご婦人には、息継ぎ姿が美しいクロールの泳ぎ方を教えたり、生徒の個性や目標に沿った指導を行っていた。だから障害があっても、水に潜ったらちゃんと顔を上げられ、安全確保ができるとわかり、その子を受け入れようとしたのだ。しかし、会社の方針で入会を断らざるを得なかった。ただ断るだけでは気が済まない伊藤さんは、片っ端から他の水泳教



室に問い合わせたが、受け入れてくれるところは皆無だった。そこで「誰もやらないなら、私がやる!!」と、近所の市民プールで1対1での指導をスタート。すると次々とロコミで広がり、障害のある子どもが続々と集まって来たのだ。

そして1992年、障害のある子どもたち向けペンギん村水泳教室を開設。以来、「可能性をあきらめない」を信念に、さまざまな障害のある生徒に対し、個性に合わせた指導を展開。水中だからこそ「できる」体験を通して、「あきらめない」気持ちを、「やってみよう」という意欲を、育んでいる。例えば二分脊椎症で足の感覚がない子どもでも、水の中なら浮力を活かして立てるし、目で見て水中で足を自由に動かせるようになると、筋肉がその動きを覚え、陸上でも水中で覚えた動きをできるようになり、装具をつけて歩けるようになるケースもあると言う。

現在、浜松市内3カ所の市民プールでレーンを貸し切って活動中。地元のプールなら生徒たちが通いやすいという一方で、地域の皆さんに障害のある「この子がここにいます」と知ってもらいたい気持ちもあるからだ。

「障害のある人のことを知らない過ぎるから時に心ない言葉を投げかけられたり、不自由な思いをする。互いを知り合うことで、だれもが一緒に活動し、尊重し合っ

て支え合い、住みやすい社会をつくりたい」と伊藤さん。30年に及ぶ活動の中では、市民プールに寄せられる苦情や障害のある児童への学校側の理解不足など、さまざまな障壁や困難にぶつかり克服して来たが、「できなかったことができるようになった時の子どもたちの表情と言ったら! またそんな子どもの姿を見て涙ぐむ保護者の様子、そうしたものが、私を突き動かす力でしょうか。生徒たちと共に歩むことで、自分一人だったら決して経験できなかったであろう何十倍もの人生を味わうことができました。どこの市民プールでも障害のある人が気軽に使え、ペンギん村水泳教室が不要になる日まで、まだまだ全力で指導しますよ」と力強く続けた。

女子国際主審・サッカー1 級審判員として国内外の試合で主審担当 スポーツ界における女性活躍を牽引

山下 良美 (1986 年生・東京都出身) サッカー1 級審判員・女子国際主審

兄の影響で、4 歳ごろからサッカーを始める。以来、女子サッカー部がなかった高校時代を除き、大学卒業後までも社会人チームでプレーを続けるほど、サッカーに傾倒。大学時代に国際審判員として活躍する先輩に誘われ審判員としてのキャリアをスタートさせると、2012 年に女子 1 級審判員、2015 年から国際審判員(女子主審)に登録。2016 年、2018 年に FIFA U-17 女子 W 杯、2019 年には FIFA 女子 W 杯と AFC CUP 2019(男子)で主審を担当。2019 年 12 月に 1 級審判員に登録され、天皇杯や JFL で主審を務める。そして 2021 年 J リーグ史上初の女性審判員として主審を担当。第 32 回オリンピック競技大会(2020/東京)でも主審として参加した。

| チャレンジの足跡 | 「足でモノを蹴るなんて、普段はお行儀が悪いと禁じられているのに、サッカーって足でボールを蹴っていいんですよ(笑)」茶目っ気のある表情でサッカーの魅力について語る山下良美さん。「しかもあれだけ大きなゴールに 11 人で一つのボールを入れるだけなのに、なかなか点が入らない。ルールは単純。でも色々な戦略が考えられるし、仲間と一緒にゴールを追い求めるチームスポーツとしての魅力も面白い」と目を輝かせ「サッカーへの熱はいつまでも冷めない」と続ける。だから審判をするにあたって、「次のプレーはこうかな」「ここでパスを出してくるかな」「攻撃の組み立てはこうかもしれない」などゲームの流れを読み、最もプレーが見やすい位置に動いているときに「え？そこにパス出すの？」「そんなコントロールするの？」と思いがけない名プレーを誰よりも間近で目の当たりにすると、審判冥利と純粋に喜びを覚えるようだ。

そのサッカー大好きな山下さんが、審判を始めたのは大学の先輩に誘われたことがきっかけ。当初は興味がわかなかつたと振り返る。しかし社会人チームでプレーしながら審判員を兼務する中で、日本女子サッカーリーグ(なでしこリーグ)の副審を担当できる 2 級の資格を取得した際に、女子のトップリーグに関わる責任の重さを実感。自身がプレーしているときは審判員の存在を気に留めたことがほとんどなかったからこそ、「自分が憧れる女子サッカーのトップリーグのフィールドに立ち、サッカーの魅力をより多くの人に伝えられるなら、審判員という新しい関わり方もある」と審判への道を決意した。

とはいえ、審判は心身ともにタフさが求められるハードな職務。1 試合で走る距離は 10km を超える。プロの審判員ではないため、試合がない日は普通に働いており、帰宅後トレーニングに励む。メニューは基本、審判試験で行われる体力テストと同じもの。持久力、スピード、筋力、瞬発力など満遍なく鍛えなければならない。しかも「チームメイトやコーチのいた選手時代とちがいで、とても孤独」と言う。さらに試合

に向けては、チームの状況や選手の特徴など、情報収集も欠かさない。とにかくひたむきで、向上心にあふれ、勤勉。常により正確な判定をするための努力を怠らない。だからだろう、選手への声の掛け方や自身が下した判定について、「こうしたらもっとよかったのではないかと、毎試合、反省ばかり」と山下さん。「見返したくない試合もある(苦笑)」が、客観的に見て分析し次に活かす。とにかく今できること、目の前の試合一つひとつに全力で取り組み、改善を重ねることで、J リーグで主審を担当する今のポジションにたどり着いた。

そんな山下さんにとって最も印象深い試合は、主審を務めた 2015 年の皇后杯全日本女子サッカー選手権の決勝戦。日本女子サッカー界を牽引してきた澤 穂希さんの引退試合であり、2 万人を超える観客が詰め

めかけた。「自分がサッカーを始めたとき、女の子はほとんどいませんでした。チームにはもちろん私だけ。だから、女子サッカーの試合にこれだけの人が集まり、いろんな人が女子サッカーの話で盛り上がっていて、とにかくそういう雰囲気が良かった。これだけ多くの人を惹きつける、日本の女子サッカーの力を感じたんです」

女性審判員として注目されることに抵抗がないわけではないが、審判や女子サッカーへの興味関心を

かき立て、ひいてはサッカーの振興につながるなら嬉しいと山下さん。

「J リーグで私が主審を担当できたのは、先輩方の莫大な功績のおかげです。全国の女性審判員がそれぞれの立場で信頼を積み重ねている努力を無駄にせず、基準をクリアし 1 級の資格を取れば、誰もが男女どちらの試合も担当できるのが当たり前になるよう、次につないでいきたい。そのために目の前の試合に一つ一つ集中するだけ」

感情が突き動かされるタイプではないと自身を分析する山下さんだが、「選手が安心してプレーに集中できる環境をつくり、お客さんが夢中になれるゲーム運びのためにも、最近では選手のプレーだけでなく内面にもフォーカスする審判を心がけています」。どこまで上り詰めても「もっと良くするには？もう一歩先へ」の気持ちは微塵も揺るがない。



■ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

本賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることをめざした表彰制度です。

	対象	選考のポイント	賞典
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げた人・団体	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的な取り組みであること(指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献した活動など)。	賞金 100 万円 (団体は 200 万円)
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げた人・団体	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値する取り組みであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによる活動など。	賞状・メダル 副賞

■選考委員会 (敬称略/五十音順/2022 年 1 月 1 日現在)

選考委員長	伊坂 忠夫	学校法人立命館 副総長、立命館大学 副学長、立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
選考委員	衛藤 隆	東京大学 名誉教授、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本こども家庭総合研究所 名誉所長
	景山 一郎	日本大学 名誉教授、一般社団法人先進路面摩擦データベース研究組合 代表理事
	川上 泰雄	早稲田大学 理事、早稲田大学 スポーツ科学部 教授
	草加 浩平	東京大学 大学院工学系研究科機械工学専攻 ディレクタ
	小島 智子	追手門学院大学 チアリーダー部ダンス部門 ヘッドコーチ
	定本 朋子	日本女子体育大学 名誉教授 特任教授
	篠原 菊紀	公立諏訪東京理科大学 工学部情報応用工学科 教授
	杉本 龍勇	法政大学 経済学部 教授
	瀬戸 邦弘	鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 准教授
	高橋 義雄	筑波大学 体育系 准教授
	野口 智博	日本大学 文理学部 教授
	増田 和実	金沢大学 人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山 弘道	学校法人千葉明德学園 千葉明德中学校、高等学校 特任講師
	村上 晴香	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
	村田 亙	専修大学 ラグビー一部監督
	ヨーコ ゼッターランド	日本女子体育大学准教授、公益財団法人日本スポーツ協会 常務理事
吉岡 伸輔	東京大学大学院 総合文化研究科 准教授	

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリストなどから候補者の推薦を募り、2 回の選考委員会を経て決定

■歴代受賞者（敬称略）

第1回 2008年度	功労賞	中野 政美（柔道指導者） 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道（車いすテニス指導者） 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 2009年度	功労賞	塚越 克己（スポーツ医・科学研究者） 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一（アスレティックトレーナー） トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 2010年度	功労賞	高田 静夫（サッカー審判員） 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之（陸上指導者） 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践 中北 浩仁（アイススレッジホッケー指導者） 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 2011年度	功労賞	岸本 健（スポーツ写真家） スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人（スポーツ写真家） 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 2012年度	功労賞	樋口 豊（フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者） 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹（ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ） 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 2013年度	功労賞	臼井 二美男（技師研究員、義肢装具士） スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京 2020 招致を支えたプロフェッショナル
第7回 2014年度	奨励賞	妻木 充法（医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナー・マスター） 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術 門田 正久（理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、 介護予防主任運動指導員） 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み
	功労賞	藤原 進一郎（日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、 日本パラリンピック委員会 元・運営委員、極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟 スポーツ委員会 元・委員長） 「すべての障がい者の生活者にスポーツを——」その信念を貫いた 40 年
第8回 2015年度	奨励賞	中島 正太（15 人制男子ラグビー日本代表チーム/7 人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト） 先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献
	功労賞	今村 大成（株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長） 日本右手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」
第9回 2016年度	奨励賞	野口 智博（日本大学文理学部 教授/木村敬一選手パーソナルコーチ） 障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦〜トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ〜
	功労賞	狩野 美雪（デフバレーボール日本代表女子チーム 監督） トップ選手の経験を活かした指導でデフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く
第10回 2017年度	功労賞	荒井 秀樹（日本パラリンピックノルディックスキーチーム監督） パラノルディックスキー、ゼロからの挑戦
	奨励賞	日本スケート連盟 スピードスケート科学サポートチーム 平昌オリンピックのスピードスケートマスタートおよび チームパシュート競技へ向けたレース分析サポート
第11回 2018年度	奨励賞	Scrum Unison（スクラムユニゾン） ラグビーワールドカップ日本大会にて世界から集まる選手やファンを 「国歌やラグビーアンセム」を歌って“おもてなし”
第12回 2019年度	奨励賞	越智 貴雄（フォトグラファー） 写真を通しパラアスリートのアスリートとしての活躍・魅力を伝播
第13回 2020年度	奨励賞	